



第60回  
青少年読書感想文  
京都府コンクール

京都府知事賞

佐賀小学校 三年

〇〇〇 〇〇

## 命をつなぐむずかしさ

三年前、ぼくは、保育園の年長組でした。三月十一日の夜：テレビを見ていると、どのチャンネルも全部、津波についてのニュースばかりでした。そして、テレビのリポーターの人が、何度も

「落ち着いてください。」  
と、言っていたのを覚えています。ぼくたちが住んでいる所は、とくに変わったことがなかったけれど、日本のどこかで、何か大変なことがおこったと、ぼくは知りませんでした。

やがて、今年の夏。学校の図書室で、表紙に海がかかれています。本が目にとまりました。波は、うねって、ゆがんで、うずをまいている所もあります。そして、ぼくは、波の間で何かこちらをにらみつけているような目が二つかいてあるのを見つけてきました。とても不気味な目でした。りくの方

ではひっしで、にげる人がいます。「語りつきお話絵本三月十一日」という黒いタイトル文字を目でたしかめて、ぼくはページをめくっていきましました。

「海が黒い水になった日」の話には、津波のおそろしさがかいてありました。特に体育館のギャラリーの下まで、まんタンに黒い津波がおしよせている絵のページは、はく力がちがいました。せんたくきのうずのようになった中で、カーテンはぞうきんしぼりみたいになじれていきます。それにしがみついているほいくしさんと子どもからは、なきさけぶ声が、すぐここまで聞こえてくるようでした。

二つ目の話「ヨシばあちゃんの紙しばい」に出てくるヨシばあちゃんは、八さいのころ大きな地しんと津波で、お母さんをなくしています。お母さんは、と中で家に食べ物を取りに家へもどってしまい、命をうしなしました。ヨシばあちゃんは、二度とこんなかなしいことがないようにと、紙しばいを作ったそうです。そこに出てくる「命てんでんこ」という言葉の意味を知った時、ぼくの心は、大きくゆさぶられました。

「津波の時は、家族がいなくても、一人でにげる」これが、「命てんでんこ」の教えです。東日本大しんさいでは、だれかをむかえに行つて、なくなった人も多かった

そうです。「命てんでんこ」をまもつていたら、助かつていたかもしれせん。でも、実さいに津波が来た時、ぼくは、自分一人にげられるだろうか。にげられたとして、自分だけが助かつたらどうしよう。不安でたまらなくなつて、ぼくは思わず家族にうち明けてみましました。

すると、母さんは、  
「家族それぞれがにげているから、それを信じたらできる。自分がしんだら〇〇がかなしむから、母さんはがんばつて一人でもにげる。だから〇〇も一人にげなよ。」  
と言いましました。

ばらばらの命をつなぐには、ゆう気や信じる力がいるし、さみしいこともりこえなければならぬからむずかしいです。でも大好きな家族のために、一歩をふみ出すことが大事だと、この本は教えてくれたと思いましました。



語りつきお話絵本 3月11日  
「にげろ!津波だ!」  
WILL こども知育研究所  
学研教育出版